

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：32689

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2017～2022

課題番号：16KK0041

研究課題名（和文）ソヴィエト非公式芸術の「歴史化」「アーカイヴ化」プロセスにおける超域的研究（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）International Research on Archiving Process of the Soviet Unofficial Art (Fostering Joint International Research)

研究代表者

神岡 理恵子 (KAMIOKA, RIEKO)

早稲田大学・文学大学院・その他（招聘研究員）

研究者番号：10454000

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 9,900,000円

渡航期間： 11ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、ソヴィエト非公式芸術の作品や資料が、当事者たちによる現在進行形の活発な創作活動が展開されるなかで、どのように歴史的に位置づけられ、アーカイヴ化されていくのか、芸術家たちへの聞き取り調査とアーカイヴ構築の現場両方から調査した。ロシアと国外との拠点を結ぶアーカイヴ・ネットワークが構築された当初、中心となるロシアとアメリカの関係先で実態を調査し、当事国以外のニーズや利便性についても提案した。創作活動が歴史的に位置づけられていく過程について、当事者である芸術家たちにも聞き取り調査を行い、充実したオーラルヒストリー資料を得られ、国内外での成果報告に反映することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ソヴィエト非公式芸術研究の主導的役割を担い、充実したアーカイヴを構築しつつあるロシア本国および米国の主要拠点において、その中心となる研究者たちの協力のもとで調査・研究を実施したことで、当該国でない立場からも資料公開への発展的な視点を示すことができた。また非公式芸術の担い手であったかつての第3波亡命芸術家たちの世代交代が進むなか、引き続き当事者に聞き取り調査をおこない、一連の活動が歴史化されるプロセスへの反応を含めた記録資料を集積できた。ロシアによるウクライナ軍事侵攻で亡命第4波が進行しつつあるが、当該課題で蓄積された資料や成果が今後の動向を読み解く一助となることを願う。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to research how the archival network of the Soviet unofficial art "RAAN" is developed and how the ongoing creative activities of the former "unofficial" artists are reflected in it. I stayed and studied at the Russian and The US archives, which founded this network, with the assistance of leading scholars and curators there. I also interviewed the former "unofficial" artists and analyzed how their activities get a historical appreciation. These archival and oral history materials were used in my papers and conference presentations.

研究分野：ロシア文化

キーワード：ソヴィエト非公式芸術 ソ連 亡命ロシア人 ロシア文化 アーカイヴ オーラルヒストリー 現代美術 ロシア

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究課題である「ソヴィエト非公式芸術の「歴史化」「アーカイブ化」プロセスにおける超域的研究」は、2015年に採択された若手研究(B)「亡命ロシア人芸術家たちの半世紀：創作の変化および現代美術史への影響と位置付け」の研究を発展させる目的で申請し、2017年に採択された。若手研究(B)では、ソ連後期(課題で調査対象としたのはとりわけ1970年代から1980年代前半)に西側諸国へ亡命したアンダーグラウンド(非公式)芸術家たちの創作活動を約半世紀にわたって追跡し、彼らの創作が国内外の芸術シーンにどのような影響を与えてきたかを調査していたが、主に以下の2つの理由から、本研究課題で調査の継続と規模の拡大を目指すことになった。

(1) 調査対象の芸術家たちはすでに高齢であり、世代交代が進んでいたため、聞き取り調査を急ぐ必要があった。彼らの多くは70歳代から80歳代であったが、なお第一線で活躍しているこの時機を逃さないことが求められた。

(2) 2010年前後から、ロシア国内外で後期ソヴィエトの非公式芸術運動の見直しと再評価の動きが活発化しており、相次ぐ展覧会の開催をはじめ情報が得やすくなっていったため、この好機を逃さず、ロシア国内での研究動向にも後れを取らないよう研究を進める必要があった。

(1)については、それまでのアメリカでの短い調査過程において、当初の想定よりも多くの亡命芸術家や関係者が様々な活動を展開していることがわかり、その調査のためにまとまった期間と手段が必要であると痛感していた。また(2)については、当時の調査過程において、非公式芸術に関する資料の体系的な保存と公開を目指す動きが進み、ロシアと国外の拠点とが連携した情報公開体制が整備されつつあるということを知る機会があり、その現場を調査する必要性があったためである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ソヴィエト非公式芸術の作品や資料が、当事者たちによる現在進行形の活発な創作活動が展開されるなかで、どのように「アーカイブ化」されていくのか、調査することである。調査対象となるかつての亡命芸術家たちは、ロシアの現代アートシーンを代表する芸術家として国内外で活発に創作活動や講演活動を展開しているため、いま起きている現象は、現在進行形の創作活動が「アーカイブ化」「歴史化」されているということでもあった。こうしたプロセスを、当事者(当事国)や美術館関係者だけではない、(第三者的な)研究者の視点で検証し、今まさに何が行われているのか/行われようとしているのか、そこにどのような意味があるのかを調査することを目的とした。ある国が自国の芸術史を世界的な文脈に位置付けていく際には、意識的/無意識的にせよ何らかの戦略が働くことは否めないため、そうした当事者意識の「外」から、ソヴィエト非公式芸術がどのような評価を獲得していくのか、冷静に研究対象として検証していくことが重要と考えられた。

また、かつては作品が残ること自体が奇跡といわれた非公式芸術をとりまく環境が激変した今、アーカイブを調査することで実際にどのような資料が保存対象となるのか。そうした一次資料にも直接触れながら、実態を把握することにつとめた。アーカイブ資料を用いて、これまで行ってきた調査を検証し発展させることも目的とした。

3. 研究の方法

本研究課題では、ソ連非公式芸術の重要な研究拠点であり、また最大規模のアーカイブでもあるロシアとアメリカの各施設を訪れ、所属する研究者との連携の下で調査を実施する。同時に、ロシアとアメリカ滞在中には、可能な限り調査対象となる芸術家たち、および周辺の関係者への聞き取り調査を実施する。聞き取り調査で得られた資料や情報は、先行研究資料との比較・検証を行い、現在進行形のアーカイブ化のプロセスにどのような影響をもたらしているのか考察する。並行して、調査対象の芸術家たちのこれまでの創作(活動)に関するデータ整理と分析も継続しておこなう。これら両方の資料と分析結果を融合させて、論文などの成果報告にまとめる。

4. 研究成果

研究開始当時、ロシアと国外拠点とを結ぶアーカイブ・ネットワーク構築を主導していたのは、ロシアのGARAGE現代美術館付属の図書館(2014年創設、アーカイブ創設は2012年)であったが、そのアーカイブを統括する責任者でキュレーターのサーシャ・オブホワ氏に協力を依頼して、同アーカイブ全体像の把握と進行中のプロジェクト調査を実施した。滞在時には、資料の収集とデジタル化、それらの公開へ向けた作業がまさに同時進行中であり、その過程を確認し学ぶことができたほか、資料の閲覧・収集も充実させることができた。同館が主催するシンポジウム等では関係者たちの生の声を聞き、調査対象としてきた時代が「歴史化」されていく現場も体験することになり、のちに研究成果の一部として論文や口頭発表などにまとめることができた。その他、滞在中にはロシア国立図書館の外ロシア部門でもソ連時代の国外出版に関する資料を調査・収集した。

その後、このネットワークの一部を構成するアメリカにおける最大拠点、ラトガース大

学ジマリー美術館でも、リサーチ・キュレーターを務めるジェーン・シャープ氏（同大美術学部准教授、現在は教授）と、同美術館でソヴィエト非公式芸術部門をかつて創設した美術史家でキュレーターのアーラ・ローゼンフェルド氏（同大美術学部非常勤講師、その後アマーフト大学勤務）の協力の下、調査を実施した。とりわけローゼンフェルド氏は同部門の展示と運営に立ち上げから長年携わってきたこの分野の第一人者であり、調査対象となる芸術家たちからの信頼も厚いため、連携して聞き取り調査などを実施できたことが本研究のさらなる拡大につながった。氏は主にニューヨークでインディペンデント・キュレーターとして広く活動しているため、ニューヨーク周辺で活動する芸術家たちへの聞き取り調査をまとめて実施したほか、亡命ロシア人コミュニティを支援してきた関連団体や施設への調査も実施することができた。滞在時に収集したオーラルヒストリーの資料は、アーカイヴで収集した資料とともに、帰国後に整理・分析などをおこなって、口頭発表や論文など成果報告に反映させた。

2017年にGARAGE 現代美術館のアーカイヴが中心となって構想し、その後ラトガース大学ジマリー美術館、ブレーメン大学東欧研究センター（ドイツ）の三拠点を結んだアーカイヴ・ネットワーク「RAAN」は徐々に規模を拡大し、現在では更にロシア国内の8拠点を追加したネットワークとなっている（主に目録の公開であり、一次資料閲覧には直接赴く必要もある）。立ち上げから間もない時期に、ロシアとアメリカの関係者たちと交流することで、日本のような国外からの関心も高く、実際にどのような資料が必要とされ、どのように資料を提供するかなど、利用者への利便性を相互確認できたことも意義のあることだった。とりわけローゼンフェルド氏はこの点を理解し、三拠点が連携されたRAANがローンチされた際のジマリー美術館を代表する挨拶文（当時）で、よりアクセスしやすいアーカイヴの必要性を強調した。

ニューヨークでの調査過程では、ソ連時代からロシア研究の拠点で知られるコロンビア大学ハリマン研究所での調査協力も得られることになり（マルク・リボヴェツキー教授）、さらに調査を継続するため研究期間を延長する運びとなった。しかし渡航直後に新型コロナウイルスの世界的流行が始まり、とりわけニューヨークでの調査活動は厳しく制限されたため、主にオンラインでの調査を余儀なくされた。従ってこの時、比較的活動しやすかった市内南部に移動・滞在し、旧ソ連からの移住者が多い地区でフィールドワークを行い、コミュニティの調査も実施した。そもそも苦難の多かった調査対象者たちにとって、このパンデミックはどのような出来事として位置づけられるのか、またコロナ禍で表現者たちがどのような活動を展開していたのか、より詳しく知る必要があると考えた。コロナ禍の活動制限が長引いたため、さらに期間を延長してこの問題に取り組むことになった。

ところがコロナ問題が終息しないうちに、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻という事態が勃発し、この衝撃的な出来事の影響も調査する必要が出てきた。最終年度は、年度初めから引き続き事態の把握に時間が費やされ、ロシア国内の表現者たちの動向や芸術関連施設の状況についての情報収集に終始することとなった。コロナによる渡航制限が緩和された2022年秋、折しも現在進行形の出来事と関連する対面の学会がセルビアのベオグラードで開催され、研究報告を行った。ソヴィエト・アンダーグラウンドから現代ロシアのアート・アクティヴィズムまでを再考する学会で、コロナ禍から軍事侵攻までの空白を埋めるべく各国のロシア研究者たちと活発な議論と情報交換ができたことは、とても貴重な機会となった。奇しくもロシア国内で「動員」の動きがあった直後のため、様々な影響を目の当たりにする機会でもあった。年度末には再びニューヨークで10日間ほど調査対象者たちへの聞き取りを実施した。軍事侵攻後のロシア人コミュニティの変化やウクライナ避難民からの聞き取りもおこない、新しいネットワークも築くことができた。

本研究課題では、調査結果をまとめている段階で新型コロナと軍事侵攻という想定外の出来事が続いたため、当初の予定を変更して調査を継続することになったが、今後は欧州におけるかつての亡命芸術家たちとブレーメン大学東欧研究センターなどへの調査目的で採択された次の課題に取り組むなかで、従来の研究も継続しつつ最終成果物の作成を続けていく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 神岡理恵子	4. 巻 27号
2. 論文標題 タミズダート誌『第三の波』からみるソ連非公式芸術の状況：創刊者A.グレーゼルの活動と初期誌面を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ロシア文化研究	6. 最初と最後の頁 1 - 21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神岡理恵子	4. 巻 10 - 1
2. 論文標題 レオニード・ラムの創作における収容所体験の位置づけ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代文芸論研究室論集れにくさ	6. 最初と最後の頁 192-207
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 神岡理恵子
2. 発表標題 ソツツ・アート再考：起源、多様性、変容
3. 学会等名 日本ロシア文学会研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 RIEKO KAMIOKA
2. 発表標題 " "
3. 学会等名 : (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
その他の 研究協 力者	リポヴェツキー マルク (Lipovetsky Mark)	コロンビア大学・ハリマン研究所・教授	研究課題を遂行する中で協力を得られ、期間を延長して渡航(ただし新型コロナ流行で大幅な活動制限を受けた)。

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ロシア	GARAGE現代美術館アーカイブ			
米国	ラトガース大学Zimmerli美術館	コロンビア大学ハリマン研究所		